赤と青の神話　終章

深江　碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
赤と青の神話　終章

【Ｎコード】
Ｎ３１９５ＢＡ

【作者名】
深江　碧

【あらすじ】
天上では、太陽の女神をはじめとした神々が、滅びの時に備えて話し合いをしていた。しかし良い案は出ず、話し合いはお開きとなった。太陽の女神は滅びの原因が、始原の大樹の枝に宿った宿り木が原因だと考える。彼女は宿り木を刈り取ろうと、始原の大樹と話をするが……。
最終章です。ようやく終わらせることが出来ます。今までつたない文章ですが目を通していただき、ありがとうございました。次の話は何にしようかと考え中です。そこで、読者の方に聞いてみた

いと思います。

次の話は？英国貴族の少年の話。？魔女見習いの少女の話。？神官見習いの少年の話。のどれがいいでしょうか？　皆様の参考意見を聞かせてもらえるとありがたいです。

はじまり1

終章　はじまり

遠い遠い空の上。
　大樹の根が地上を支え、その枝先が伸びている神々の世界。
　天上にある湖の水鏡越しに、二人の神様が地上の様子を眺めていました。
「二人とも、可哀想」
　大地の女神は悲しげにつぶやきます。
　木の根本にもたれかかっていた風の神は、不思議そうに尋ねます。
「何が可哀想なんだ？　火の神も、水の女神も、十分元気にやっているじゃないか」
　大地の女神は涙のたまった目で、風の神を振り返ります。
「だって、二人ともとっても辛い目や、苦しい目に何度も合っているのよ？　そしてこれからも、何度も大変な目に合わなきゃいけないのよ？」
「まあ、そうだな」
　風の神は湖面に目を落としました。
「こんなの可哀想過ぎるよ。せっかく、二人が出会うことが出来たのに、火の神の記憶が戻らないなんて。彼の記憶が戻らないと、天上に返って来れないなんて」
　――たとえ天上に戻ってきても、おれ達神々が滅ぶ道しか待ってないけどな。
　風の神はため息をつきます。
　大地の女神の落とした涙は湖の水面に波紋を作り、春の訪れを待つ草木の慈雨にとなって地上に降り注ぎます。

「わたし達で出来ることなら。二人の助けになってあげたい」
――だから、おれ達神々を助けてくれってか？　神々も二人を地上に落としておいて、都合のいいことだ。
風の神は草の上から立ち上がり、湖の畔でうずくまる大地の女神に歩み寄ります。
「大丈夫だって」
風の神は大地の女神の頭に手を置きます。
「おれ達が心配しなくても、二人は大丈夫だ。地上で元気にやっていくさ」
そう言って、大地の女神の茶色の髪をくしゃくしゃと撫でます。
「それにな、可哀想、可哀想、と言うのは、精一杯地上で生きてる二人にとって、失礼じゃないのか？」
そこで初めて大地の女神は泣くのをやめて、上を見上げます。
「そうなの？」
大樹の枝の間から、優しい木漏れ日が降り注いできます。
「そうだ。だから、もうこれ以上泣くな」
大地の女神は風の神の深緑の瞳を見つめ、うなずきます。
「うん、そうだね。じゃあこれからは、二人が嬉しいとき、一緒に喜んであげることにする」
大地の女神は目尻の涙をぬぐい、輝くような笑顔を浮かべました。

同じ頃、大樹の頂上の広間では、天上の主立った神々を集めて会議が行われていました。
神々の滅びの時をどう回避するか。
そのためには具体的にどういう手段を講じればいいのか、太陽の女神を中心に話し合われていました。
しかし何一つ建設的な意見が出ない中、太陽の女神は議論を中断し、結論を後日に持ち越すことにしました。
神々が広間を去ったのを見届けて、忘れ去られたようにある部

屋の隅にある階段を太陽の女神は登っていきます。
階段を上りきると、そこは宮殿の頂上でした。
白い石の屋根が緩やかな円形を築き、その中央から大樹の太い幹が伸びています。
春先のためか、枝には葉がほとんど無く、緑の新芽が随所に見られるだけでした。
太陽の女神は丸い屋根の上を歩き、大樹の幹の前にたどり着きました。
大樹の幹は近づけば端が見えないばかりに太く、見上げれば空に霞むくらい高く枝を張り巡らせています。
その枝先の一つに、緑の葉を付けた宿り木が生えていました。
「滅びは突然訪れるものではない。目に見えない場所で、しかし着実と枝葉を伸ばし、進行してくるものだ。何者にも止めることは出来ない。何者にも等しく滅びは訪れる」
春先の冷たい風に混じり、その声は太陽の女神の耳に重く響きます。
辺りに声を発したと思われる人影はなく、巨大な木が風に枝を振るわせているだけでした。
「あなたは、滅びを受け入れろとおっしゃるのですか？　原初の大樹よ」
太陽の女神は片手で大樹の太い幹に触れ、枝先を見上げます。
「受け入れるも、受け入れないも、無いであろう。なあ、太陽の女神よ。わたしの枝にこの宿り木が宿った時から、いつかこのような事態が起こることは、あらかじめ予見していた」
太陽の女神は膝を折り、幹にしがみつきます。
「どうして、わたし達に教えてくださらなかったのですか？　どうしてお命じにならないのですか？　この宿り木を刈り取れと、どうして？」
太陽の女神はざらざらとした幹に両手を叩きつけ、頭を垂れます。
「お前達こそ、どうして滅びを避けようとする？　何故受け入れよ

うとしない？　いつかはわたしも枯れ、倒れるときが来る。それが早いか、遅いかの違いだけというのに」
「それでも！　それでも、わたし達は滅びの時を少しでも遅らせようと」
絞り出すように太陽の女神は声を張り上げます。
「この世のあらゆるものの命に限りがあるように、わたし達とて永遠ではないのだ」
凛とした声が青空に木霊し、やがて消えました。
太陽の女神は力なく屋根の上にうずくまりました。
「ふふっ、滑稽だな。進むべき道を示すわたしが、こうして道を見誤るとは」
拳を握りしめ、太陽の女神は地面を叩きます。
何度も叩くうちに、細い指からは血がにじみ、白い石の屋根にしたたり落ちます。
「太陽の女神様！」
白い丸屋根の上を、陽光を背に二つの人影が近づいてきます。
走り寄ってきたのは、大地の女神と風の神でした。
「太陽の女神様。どうか、そんなにご自分を責めないでください」
大地の女神は血がにじむ太陽の女神の手をそっと包みます。
「太陽の女神様がこんなことなさるなんて。一体どうなさったのです？」
「どうせ、神々の会議で行き詰まって、自暴自棄になっているだけさ。折角神々を集めて、滅びの時の危機を知らせても、会議で良い案が出ないんじゃあ、意味が無いしね」
「風の神！」
大地の女神が風の神を怒鳴りつけます。
「いや、かまわない。本当のことだ」
太陽の女神は頭を振り、ゆっくりと立ち上がります。
太陽の女神は血のにじんだ指にふっと息を吹きかけます。
すると傷はみるみるふさがって、傷跡一つ無い白くしなやかな

肌に戻りました。
「それで、お前は結局何が言いたいんだ？　わたしに言いたいことがあるのだろう？」
太陽の女神の力強い視線に、風の神は揺るぎない深緑の目を向けます。
「太陽の女神様は、おれ達にまだ何か隠していることがあるんじゃないのか？　例えば、あの宿り木のこととか」
風の神は大樹の枝先にある、緑の宿り木を指さした。
「そうだな」
太陽の女神は明るい春の日差しを振り仰ぎ、目を細めました。
「そろそろ、すべてを話してもいい時なのかもしれんな」
太陽の女神は大樹の太い幹を見上げ、赤い裾でその幹をそっと撫でます。
冷たい風が大樹の枝を揺らし、ぎしぎしときしんだ音を立てました。

はじまり2

「まさか今頃になって、お前がここにやってくるとはな」
眼帯を付けたケーディンは、向かいに座るクロフに話しかけた。
窓から明るい光が差し込み、炉の上にかけてある鍋の中の湯がくつくつと煮立っている。
「ちょっと色々あって遅くなったけど、あの時の約束を果たしに来たんだ」
ケーディンは豪快に笑う。
「おれはお前が約束を忘れているか、どこかでくたばっているかとずっと思ってたんだけどな」
「残念だね。この通り、ぴんぴんしてるよ。まあ、死にそうな目には何度も会ったけれど」
クロフは苦笑いを浮かべる。ケーディンはあごの無精ひげに手を当てる。
「お前、二年前に会ったときと、ずいぶん変わったな」
クロフは持っていた木のカップをテーブルに戻す。
無意識のうちに自分の身なりを見回し、そこで初めてケーディンの両目が見えないことに思い至る。
その気配を察したケーディンは、思わず吹き出した。
「そういうわけじゃない。今のおれにはお前の外見なんてわかりっこないんだよ。そうじゃなくて、雰囲気だよ、雰囲気。二年前に会ったときは、やたら敬語を使って、いかにも育ちのいい神官様、っていう取っつきにくい印象だったんだよ。覚えてるか？」
クロフは木のコップの中に揺れる薬草湯をのぞき込む。
「だが、今のお前は、肩の力が抜けたって言うのか、自然ないい話し方になったな」

ケーディンはテーブルに肘をのせる。
「まあ、おれの気のせいかも知れないが」
「ありがとう。それはほめ言葉として受け取っておくよ」
二人のいる部屋の窓から、春先のやわらかい日差しが差し込み、テーブルの上に飾られた花を明るく照らす。
廊下に足音が響き、戸口から一人の女の子が飛び込んでくる。
「ごめんなさい。遅くなって。これ、わたしが焼いたリンゴのパイです。吟遊詩人様のお口に合うかどうか」
女の子はテーブルの真ん中に大きな丸い木の皿を置く。
その中には狐色にこんがり焼けたパイが、部屋中に甘い香りを漂わせている。
「ありがとう、とてもおいしそうだよ」
「よかった」
女の子はそう言って、クロフにパイを切り分けた。
「はい、これはお兄ちゃんの分」
切り分けたパイを今度はケーディンに渡す。
ケーディンは目が見えないのが嘘のように、器用に木の皿を受け取る。
クロフが戸口に目を向けると、廊下の薄暗がりから恨めしそうな目がいくつもこちらをのぞいている。
「お姉ちゃん、ぼく達の分は？」
女の子はパイを木の皿に取り分けている姿勢のまま固まった。
顔を赤くして足早に戸口の方へ歩いていく。
「こらっ！　吟遊詩人様の前で、何やってんの！」
「いや、別にかまわないけれど。君たちも良かったらパイを一緒に食べないかい？」
クロフが女の子を諭す。
「ほら、吟遊詩人のお兄ちゃんも、ああ言ってることだし」
子供達は抜き足差し足、女の子の隣を通り過ぎていく。
「もおっ！」

女の子はパイを切り分けていた木のナイフを腹立ち紛れにがむしゃらに振り回す。
「ただし、あんた達の分は、お客様に切り分けた後だからね！」
女の子はテーブルの上に出しておいた三つ目の皿に、パイを盛りつけ、それを片手に持ったまま部屋を見回した。
「あの、吟遊詩人様のお連れの方は？」
クロフは窓の外を指さし、苦笑いを浮かべる。
「ケーディンの目の治療には、きれいな泉の水が必要だからって、森の泉に向かったよ」
女の子は木の皿をテーブルの上に置き、ケーディンを振り返る。
「女の人を一人で森に行かせたの？　信じられない。どうしてお兄ちゃん、着いていってあげなかったの？」
ケーディンは女の子の冷ややかな視線を感じ、立ち上がった。
「お前な、おれは目が見えないんだぞ！　目が見えなくて、どうやって森の泉まで着いて行けと？」
「でも、お兄ちゃんは元傭兵なんでしょ？　目が見えなくたって、あまり生活に不便は感じてないみたいだし。そんなお兄ちゃんでも、女の人一人くらいなら守れるでしょう？」
「無理言うなよ。目が見えないおれが、どうやって相手を守るんだ」
「物語にはいるじゃない？　盲目のかっこいい剣士。あ、お兄ちゃんはかっこよくないけど」
「お前な、おれをあんな化け物みたいな奴等と一緒にするんじゃない」
クロフは苦笑いを浮かべ、この兄妹げんかを見ていた。
「それに家の中でもおれは不便を感じているんだぞ。その証拠に、しょっちゅう物にぶつかるじゃないか」
「それはお兄ちゃんの図体がでかいだけよ。この前なんて、戸口にだって頭ぶつけたじゃない」
クロフは木のコップを両手で包み、薬草茶を一口飲み下す。
兄や妹の言い合いや、弟達のにぎやかな声に包まれて、クロフ

は窓の外をのんびりと眺める。
窓の外では若草色の草木が芽吹き、色とりどりの花があちらこちらに咲いている。
小鳥がさえずり、虫達が花々の上を忙しそうに飛び回っている。
クロフは湯気のうっすらと立ち上るコップの中をのぞき込み、もう一口お茶を口に含んだ。

はじまり3

芽吹き始めた木の枝や下草をかき分け、ディリーアは泉の石組みの前にたどり着いた。
泉の石組みの前には、小さな木桶と石で出来た女神の像が安置してある。
ディリーアは石の上に残った水の流れた跡に手で触れ、辺りを見回した。
――泉は枯れてしまったのか？
ディリーアは石組みの側の土に耳を当て、静かに目を閉じた。
暗闇の遠いところから、かすかな水のせせらぎが聞こえてくる。
――やはり、水は地中に潜っただけか。
ディリーアがそう考えていると、側の茂みが風もないのに揺れ、そこから一匹の蛇が這い出てきた。
白い蛇は赤い舌をちろちろと出し、金の瞳でディリーアを見上げた。
「久しいな、水の女神よ」
白い蛇は地に響くような声でつぶやく。
「月の神か」
ディリーアは青く涼やかな目差しで見下ろす。
「わたしに何の用だ？　まさか月の神の使者を追い返された恨み言を言いに来たのか？」
白い蛇は身をくねらせ、泉の石組みの上に這い登った。
「あれはたまたま、火の神が人間として生きる意志が強かっただけのこと。お前のせいでも、ましてや使者の責任でもない」
ディリーアの青い瞳と、蛇の金の瞳がぶつかる。
「それで？」

ディリーアは目をそらさずに尋ねる。
「一体わたしに何の用だ？」
蛇はくっくっと声を立てて笑う。
「忠告をお節介にもしてやろうと思ってな」
白い蛇は赤い舌を出し、ディリーアを見上げる。
「お前は、人間としてこの地上に生まれ落ちてから、ずいぶん色々な経験をしたようだな。それでどうだ？　いい加減悟っただろう？」
「何のことだ？」
ディリーアは短く答える。
蛇は金の目を妖しく光らせ、口元を奇妙に歪める。
「人間の愚かさだ」
ディリーアは黙ったまま、蛇を見下ろしている。
「人間は同種族でありながら互いに憎しみ合い、戦い殺し合う。自分の理解できない存在を嫌悪し、排除しようとする。お前も今までに見てきただろう？　そのような人間達を」
ディリーアはうつむき、青い目を細める。
「そうだな。そのような人間はごまんと見てきたな。だがな」
蛇の次の言葉を遮るように声を張り上げる。
「そうではない人間もごまんと見てきた。世界には、他人を思いやり、労ってくれる人間もいる。クロフがそうだ。あいつは、わたしが大蛇の姿をしていても、驚かなかった」
ディリーアは淡々と語る。
「火の神の生まれ変わりだから、あいつは特別だからとか言いたいんだろう？　だがな、あいつは太陽の女神の啓示に導かれはしたが、火の神の記憶は持っていない。それなのに、あいつはわたしのところに来て言ったんだぞ。あなたの姿が醜いとは思わないと。わたしはそれが嬉しかった。そして、覚悟一つあれば、わたしの姿を見ても怖く思わない人間がいることを、本当に嬉しく思ったんだ。それだけで、わたしは救われ、希望を持つことが出来た」
森の木々を揺らし、春先の冷たい風が吹き抜ける。

乾いた音を立てて、下草が風になびく。
「もう一つ忠告しよう。もしお前がこの泉の流れを取り戻したならば、近い未来、この村で泉の水を巡って争いが起こるだろう。この土地は実りもそれほど豊かではなく、人々はいつも水に不自由してきた。だがそれ故に、周囲の権力者はこの土地に興味を持たなかった。この土地が水の豊かな土地になれば、必ずや権力者はこの土地を手に入れようと躍起になるだろう」
ディリーアは青い目を細める。
「確かに、月の神の言うことも一理ある。だが、わたしはそんな先の未来のことまでは責任もてない。水の女神として、限りない命を持っていた頃なら別として、今は限りある人の身、お前の言う愚かな人間の一人だからな」
ディリーアは石組みの上に祭られている石の女神像に触れる。
女神像は長い間風雨にさらされ、輪郭しかわからなくなっていた。
「最後に、お前に尋ねたいことがある」
ディリーアは顔を上げる。
白い蛇の金の瞳からは、依然何の感情も読み取れない。
「もう一度、水の女神として天上に戻りたいか？」
金の瞳に初めて哀れみの感情が宿る。
「さあな。人間の女として、最後まで人生を送ってみないと、わからないな」
白い蛇は何も言わず、茂みの奥に消えていった。
強い風が木々を揺らし、ディリーアの黒髪を揺らす。
ディリーアは長いため息を吐いた。
森に再び小鳥の声が戻ってきた。
森のあちこちから動物のたてる物音、木々のざわめきが聞こえてくる。
ディリーアは泉の石組みの前に立ち、そっと手を合わせる。
「水よ、吹き出せ」
ディリーアが叫ぶと、ごぼりと小さな音が地中から響いてきた。

水の流れるせせらぎとともに、石組みの上を細い水が流れ出した。
「おーい」
森の小道の向こうから、クロフのディリーアを呼ぶ声が近づいてくる。
クロフは茂みをかき分け、道の小道を歩いてくる。
その後ろに女の子、杖をついたケーディンが続く。
女の子は泉の水が流れているのを見て、あっと叫んだ。
「うそ、この泉の水は数十年以上前に枯れたはずじゃあ」
驚いている女の子の横を通り、ケーディンはディリーアに近づく。
「それで、おれの目は、治してもらえるんだろうな？」
ケーディンはディリーアに疑いの表情を向ける。
「ああ、この泉の水があれば大丈夫だ」
「なら、いいが」
ケーディンは鼻を鳴らす。
ディリーアはケーディンを泉の石垣に座らせ、その眼帯を外す。
眼帯の下から現れたのは、赤く焼けただれ、黒ずんだ皮膚だった。
女の子が思わず顔を背ける。
ディリーアはその両目に指で触れようと手を伸ばした。
途端、ケーディンがその両腕をつかみ、ディリーアにだけ聞こえる小さな声でささやく。
「まさかあの大蛇が、こんな細い腕をした女だとは、驚きだな」
「クロフから、聞いたのか？」
ディリーアは青い目を驚きに見開く。
「おれが頼んで教えてもらったんだ。あいつは悪くない」
ディリーアは小さなため息をついた。
「それでどうするつもりだ？　わたしを殺すのか？」
その問いに、ケーディンは豪快に笑って見せる。
「今更あんたをどうにかしようとは、思っちゃいないさ。おれも元傭兵なんでね。自分が生き残るために殺した奴や、おれを殺そうとした奴のことを、とやかく言うつもりはない。こっちが殺さなきゃ、

自分が殺されていただろう。それは、仕方のないことだ」
「ならば何だ？　わたしに何か言いたいことがあるのだろう？」
動きを止めた二人に、クロフと女の子は不審の目を向ける。
「ただな、あんたも大蛇として苦しんできたんだろうが、おれも二年以上目の見えない不自由な生活を送ってきたんだ。わびの一つもしてくれなきゃ、割が合わない」
ディリーアは急に顔を赤くして、ケーディンにつかまれていた両腕を振りほどく。
「誰が、そんなこと！」
ディリーアは顔を真っ赤にして叫ぶ。
「おいおい、怒るほどのことかよ？」
ケーディンは無精ひげの生えたあごをさする。
「謝ることくらい、子供にだって出来るだろ？　ごめんなさい、って言ってくれれば、それで許してやろうと思ってたのにな」
ディリーアは二の句が継げなかった。
かろうじて怒りを飲み下し、口を開く。
「ご、ごめんなさい」
蚊の鳴くような声でつぶやく。
ケーディンは肩をすくめ、妹や弟達にするのと同じように、ディリーアの黒髪を撫でる。
「わかればいいんだよ」
人なつっこい笑みを浮かべ、ディリーアを見下ろしていた。

「もう行くのか？　もっとゆっくりしていけばいいだろうに」
ケーディンの見送りに、クロフは門前で馬の手綱を握り、静かに微笑んだ。
「ありがとう。でもあまりここに長く留まっていると、離れられなくなりそうだから」
別れを惜しむケーディンに、女の子が茶々を入れる。

「もう、お兄ちゃんったら。いつもいつも大げさなんだから」
ディリーアは馬の背の上でため息をついた。
「やれやれ、こいつの目を治しに来ただけなのに、散々な目にあった」
森の泉でケーディンの目を治した後、三人が村に帰るとその噂は見る間に広まった。
噂を聞きつけた村人達が森の泉に押し寄せ、大混乱となったのだ。
そしてその水で、村人達の病が本当に治ったからたまらない。
村ではすぐに盛大な祭りが執り行われた。
その祭りは三日三晩続き、そのため二人は今日まで村人達に村に引き留められていたのだった。
「じゃあ、もう行かないと」
クロフは栗色の馬の首を撫で、ディリーアの前に飛び乗る。
「おい、言い忘れたが。あの姫さん、今度結婚するそうだぞ。相手は森の化け物を退治した、神官長らしい」
ケーディンと女の子が遠ざかっていくクロフに手を振る。
「もし南に行く用事があったら、寄ってやれよ。姫さん、喜ぶぞ！」
クロフは二人の姿が見えなくなるまで、ずっと手を振り続けていた。
村の家々が丘の彼方に見えなくなって、クロフは前に向き直った。
「残念だったな」
ディリーアはクロフの背にもたれかかり、その腰に両手を回す。
「ひょっとしたら、姫と結婚していたのは、お前かも知れないぞ。なにしろ姫は、お前のことが好きだったんだからな」
ディリーアはたたみかけるように言いつのる。
「どうせお前のことだ。姫の気持ちに気付かなかったんだろう？」
クロフは気まずそうに視線をそらす。
「そっちこそ、北の国でコナルと仲が良かったみたいだけど」
今度はディリーアの方が渋い顔をする番だった。
「君の姿を見るなり、いきなり抱きついてきてさ。ぼくがいない間

に、何があったんだか」
「べ、別に、何もない」
辺りに気まずい沈黙が落ちる。
「まあまあ、夫婦げんかは犬も食わぬと申しますし。それくらいにしておかれては」
栗毛の馬はゆったりした歩調と同じように、やわらかな口調で話す。
空では温かい日差しと、馬ののんびりしたひづめの音が野原に響く。
「もういいよ。どうせ、全部終わったことだから」
「そうだな。過ぎたことよりも、これからのことを考えないとな」
クロフとディリーアは背中を合わせ、二人して青い空を見上げる。
「まずは、ぼくが火の神であった頃の記憶を取り戻さないと」
「わたしは、今のままでもいいと思うぞ」
ディリーアはこともなげに言い放つ。
「無理して思い出す必要は無いし、それに、わたしは今のお前も、好きだぞ」
ディリーアはクロフの背中に自分の背を預け、足を投げ出した。
クロフの返事はなかった。
ディリーアがクロフの後ろ姿盗み見ると、耳の辺りがわずかに赤みを帯びていた。
両手を思い切り空に伸ばし、ディリーアは緑の香りを胸一杯に吸い込む。
青空の高いところでは、太陽を背にしてヒバリがさかんにさえずっていた。

おわり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3195ba/

赤と青の神話　終章

2012年1月10日08時48分発行